



## 名古屋港浚渫土砂の有効活用を目指した取り組みが評価 ～リサイクルアワード2015「リサイクル利用促進賞」受賞～

平成27年5月19日（火）、東京国際フォーラムにおいて、名古屋港湾事務所が取り組んできた「名古屋港浚渫土砂利活用技術検討事業」が、特定非営利活動法人リサイクルソリューション（所在地：東京都中央区）が主催するリサイクルアワード2015の「リサイクル利用促進賞」を受賞した。

リサイクルソリューションは、平成11年に各種インフラストラクチャー整備にかかる資材の再利用、資源化、減量化、維持費低廉化等、限られた資源の活用に関するリサイクル技術等の調査、研究、啓蒙、普及並びにリサイクル推進のための体制、法制整備のための諸活動を行うことにより、リサイクル社会の構築をめざし、広く一般の利益の増進に寄与することを目的とし設立された組織で、リサイクルのための新材料・技術の調査、研究、普及および啓蒙を行っている。リサイクルアワードはその活動の一環として、リサイクル技術についての更なる啓蒙、普及を図る観点から、特にリサイクルの利用に優秀な成果を収めた者を表彰しているもので、「リサイクル利用促進賞」と「リサイクル企画賞」の2種類がある。

名古屋港湾事務所では、名古屋港で発生する浚渫土砂の有効活用を目指し、平成18年度から利活用方策の検討を行ってきており、平成24年度に港内に干潟実証実験施設を設置しモニタリングを行い、平成26年度に実証実験結果とこれまでの検討結果を取りまとめた。今回はその取り組みが先進的な事例として評価され、「リサイクル利用促進賞」の受賞となった。

授賞式の後、受賞者である名古屋港湾事務所から事業の概要についてプレゼンテーションを行い、これまでの実証実験の結果と課題のほか、新たな実証実験計画や浚渫土砂を使用した人工石の活用など、今後の取り組みの方針が発表され、出席者からは大きな反響があった。



受賞式の様子

配布先 中部地方整備局記者クラブ、専門紙記者会、名古屋港記者クラブ、港湾新聞、港湾  
空港タイムズ、日本海事新聞、海事プレス

問合せ先

国土交通省 中部地方整備局 名古屋港湾事務所  
企画調整課 板生(いたお)

TEL 052-651-6763 FAX 052-652-0303



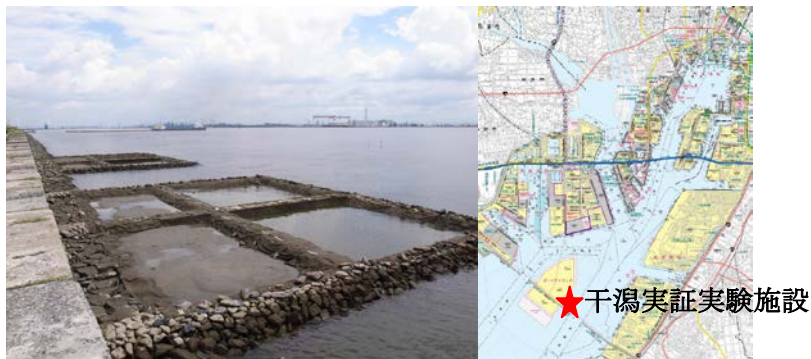
## <参考>

### ○事業の背景

名古屋港は、一級河川庄内川の河口に位置し、遠浅の海に面した港湾であるため、河川からの流入土砂による埋没の防止や、船舶の大型化に対応するための航路・泊地の拡幅、増深など、港湾機能の強化・維持のため、海の底を掘る「浚渫」事業が必要不可欠であり、常に「浚渫土砂」が発生し、その処分を行う必要がある。

ポートアイランドは、昭和 50 年から累計約 5,000 万 m<sup>3</sup> の浚渫土砂を受入れ、近年の浚渫量は年間約 100 万 m<sup>3</sup> という状況。ポートアイランドは、名古屋港及び背後産業の発展を支えてきたが、当初計画した埋立高から 10 m 以上の高さまで仮置きが行われている状態。循環型社会形成への要請を背景として、良好な環境の再生等に利活用するための技術や、新たな社会システムの整備が要望されていることも併せ、名古屋港で発生する浚渫土砂の利活用が重要な課題となっている。

### ○名古屋港 干潟実証実験施設の状況



### ○干潟実証実験結果

干潟実証実験では、「干潟の安定性・安全性」及び「生物生息環境としての有効性」に関して評価した。

その結果は、名古屋港の浚渫土砂を用いた港内での干潟造成に関して有効であるというもの（表－1）。

なお、従来の知見では、アサリにとって水深 N.P. ±0.0m 付近が、適した生息環境とされているが、当実験施設では、水深 N.P. ±0.0m より、水深 N.P. +0.7m の方がアサリ個体数が多く確認された。また、高潮防波堤の外側のような波高の高い海域での干潟安定性は今後の課題となっている（表－2）。



表－1 干潟実証実験の成果

分類	項目	成果
干潟の安定性・安全性	地形変化	波浪等の外力が小さく、砂面、覆砂厚、覆砂の泥分率ともに安定しており、改質の有無と水深の違いは少なかった
	土質強度	造成直後を除き中詰材の目標条件を満足し、安全性は検証された。
生物生息環境としての有効性	指標生物	名古屋港内でアサリが生息（サイクル）できることが検証された。干潟の材料（中詰材）による違いはなかった。 水深（上段と下段）による生息状況が異なりその原因として、貧酸素、浮泥、及び食害生物の影響が考えられ、DO 連続観測によって貧酸素の影響はないことが分かった。
	水質	一時的に軽度の貧酸素状態となる場合があるが、指標生物の生息環境として問題ないと判断された。
	底質	各項目ともに目標値をほぼ満足でき、指標生物の生息環境として問題ないと判断された。
	底生生物	指標生物以外の底生生物は順調に加入し生態系が安定状態となりつつあることが認められた。下段では食害生物の存在が大きいことが考えられた。

表－2 干潟実証実験における課題

分類	項目	課題
干潟の安定性・安全性	地形変化	高潮防波堤内では問題ない
	土質強度	改質率と発現強度の関係において逆転していた。貧配合時の混合や施工方法の検証が必要である。
生物生息環境としての有効性	指標生物	水深（上段と下段）による生息状況が異なり、従来の知見（NP0m で多い）とは異なる結果となったが、その原因は浮泥の影響か食害生物の影響かの特定までは至っていない。
	水質	現施設では問題ない
	底質	下段での浮泥堆積が懸念される
	底生生物	食害生物の存在が懸念される